秋田県

シニア災害ボランティアセミナー開催報告

シニア世代のボランティア活動

平成25年11月1日（金）、秋田県の県庁第2庁舎大会議室において、シニア世代のボランティアへの参加について考える機会を設ける目的で、秋田県、当協会の主催による「災害ボランティアセミナー～シニア世代のボランティア活動～」が開催されました。

まず、冒頭に、主催者を代表して、当協会の大竹邦実理事長、秋田県の木村宗敬総務部長が挨拶し、続いて、東北福祉大学の小松洋吉教授による基調講演、NPO法人ひょうご地域防災サポート隊の伊藤道司理事長による事例発表、ボランティア団体の、あべ十全氏による事例発表が行われました。なお、講演会の概要はつぎのとおりです。

基調講演 13：10～14：10

シニア災害ボランティアを考える

東北福祉大学教授　小松洋吉氏

1　歴史の転換点を生きる

東日本大震災により、生き方、生活の仕方、考え方の価値観が大きく変わったり、或いは揺らいだりして、今後のあり方を考える時期に来ている。

2　防災から減災へ

「減災ミックス論」…自己の備え（自助）、地域での助け合い（共助）、国・市町村の支援（公助）が互いにうまく機能し、備えることによって結果が大きく変わる。

住民の交流を深め、顔の見える関係づくりをすることで減災につながる。

3　自分の命は自分で、地域の安全は地域で

自分のことはできるだけ自分で備えておく必要がある（自助）。例えば、情報を得る、避難口の確保等。

また、共助として、「普段からの近所付き合いを行う（声かけ、見守り、信頼関係）」「防災訓練の実施」「防災組織の充実、機能化」「地域の専門力」。

4　災害とボランティア

大切なこととしては、①センター機能の充実、②コーディネーターの育成、確保、③ニーズの把握とそのシステム、④受け入れるという「受援力」、⑤異なる地域とのネットワーク力、⑥専門力（医療、情報処理技術等）。要援護者支援ボランティアは独立組織であるべき。

5　多様なボランティア活動

①心を寄り添う（共感）、②豊富な知識技術をいかす（シニアは経験知識、知恵が豊富）、③できることをできるだけする、④継続する。

活動例としては、心のケア、各種相談等。

6　地域の減災活動とその視点

基本視点とは、①「守る」―生命、文化、生活、財産、②「学ぶ」―安全、安心、生

小松 洋吉
東北福祉大学教授
東京大学文部教官を経て、現在、東北福祉大学・大学院教授、東北学院大学非常勤講師を務める。その他、宮城県防災教育指針作成協議会委員、宮城県共同募金副会長兼常務理事、仙台市社会福祉協議会副会長、仙台市災害時要援護者支援プラン検討会議委員長などの要職を務めている。

命、③「育む」―人間力、生活力、市民力を育む、④「つくる」―地域力、自分力、の4つの視点が大切である。

事例発表1　14：20～15：20
防災ボランティア ～活動と今後のあり方～

NPO法人ひょうご地域防災サポート隊
理事長　伊藤道司氏

防災ボランティア活動を通しての課題点、改善点をふまえ、今後の活動とそのあり方についてお話いただきました。

1　私たちの防災活動

「守れ　いのちを！地域の防災」――自分の命は自分で守るがモットー。まちを知り、災害を知り、人を知る。そしてその地形・状況・住まい方にあった準備、対策を考えることが大切。

伊藤 道司
NPO法人ひょうご地域防災サポート隊　理事長

1965年大阪工業大学土木工学科卒業後、兵庫県に奉職。兵庫県土木部港湾課長、兵庫県企業庁淡路建設局長、兵庫県土木部次長、兵庫県企業庁地域整備局長を歴任。2001年4月から2004年12月まで明石市助役。2006年1月にNPO法人ひょうご地域防災サポート隊を設立し、理事長を務めている。

2　大震災などから学んだこと

リーダーの存在、リーダーの確保、情報伝達の正確さ、女性の視点も考慮した避難所、車での避難の課題点など。自助の大切さ。

3　もし南海トラフが動いたら

規模の違いが大きいことを認識し、備えるためには、「防災意識を高める」「津波避難ビルの活用」「建物の耐震化への取り組み」等があげられる。

4　シニアと防災ボランティア

東日本大震災への支援について、兵庫県の体制と現状、兵庫県の防災ボランティアの活動の紹介。

5　今後のあり方を考える

阪神・淡路大震災とNPO法人、NPO法人の課題（収益事業でない、高齢化等）。

事例発表2　15：30～16：30
東日本大震災における ボランティア活動について

ボランティア団体代表　あべ十全氏

東日本大震災におけるボランティア活動について、ご自身の活動を通して、必要なこと、求められていること、改善した方がよい点等をわかりやすくお話いただきました。

概要は次のとおりです。

1　3月11日の出来事

①仙台市のある観光ホテルでの出来事
②他の地区での神社の宮司さんのケース
③南相馬市の状況

各々その場にてどのような状況であり、避難に際してはどのような行動をとったのか等を具体的にお話いただきました。

2　震災後の状況と経過について

ボランティアランティア活動をする上で、必要なこと

①被災者の家族への配慮
②ボランティア活動をスムーズに進めるためのマッチング作業の重要性
③避難所での女性への配慮

3　ボランティア活動をスムーズにマッチングさせる方法

担当ごとに色分けし、活動しやすくする等、具体例を挙げてわかりやすく、アドバイスいただきました。

以上、災害ボランティア活動について各方面より異なった視点でお話いただきました。

今後の防災への取り組み、自助の大切さ、ボランティア活動のあり方等を考える上で、大変参考となる講義となりました。

あべ 十全
ボランティア団体代表

地元・秋田でタレント活動の傍ら、筋ジス病棟支援・お出かけ支援など精力的にボランティア活動をしている。東日本大震災の際には、福島県からの避難者受け入れ、支援物資受け入れ、がれき撤去、理容支援、周年法要行事支援などの活動に携わり、現在も岩手県大槌町を中心に支援活動を続けている。